

第5回（通算第24回）子育て講座（子育てについて聖書に聞く会）

2019. 1. 24 子供の家幼稚園

宗教主事 浦上結慈

「あなたがたの中に、百匹の羊を持っている人がいて、その一匹を見失ったとすれば、九十九匹を野原に残して、見失った一匹を見つけ出すまで捜し回らないだろうか。そして、見つけたら、喜んでその羊を担いで、家に帰り、友達や近所の人々を呼び集めて、「見失った羊を見つけたので、一緒に喜んでください」と言うであろう。言うておくが、このように、悔い改める一人の罪人については、悔い改める必要のない九十九人の正しい人についてよりも大きな喜びが天にある。」  
(ルカ 15：4-7)

今日は聖書の話をしてします。上記の話はイエスが弟子たちに語った譬え話です。今ではこの話は教会を離れキリスト教を離れて社会の中でも語り継がれています。しかし、どのように語り継がれているのかということ…。

確かに、読んでみて「おかしい」と思います。会社の運営はこの正反対のことをして、正反対のことをしないと会社が倒産してしまうと思っているからです。だから、この話を読んで「それはないだろ！」と語り継がれます。現実には、会社が傾きかけると足切りを行い、リストラを実行して根元を守らざるを得ないため、その結果、この譬え話は「とてもいい話だけれども、建て前で理想論でしかない」と断定されて、それでこの譬え話は集結します。

確かに、この譬え話は「建て前」のような性格として読むことができます。「本当はこうであつたらいいけれども、それができない。だから我が会社の見据えるべき目標として掲げておこう」という「建て前」です。しかし、2000年前に生きたイエスは、ここで「建て前」「理想論」を語るような余裕があつたのでしょうか。いいえ。これはイエスにとって「建て前」ではなく、ましてや「理想論」でもありませんでした。この世の在り方をズバリと語つたのです。だから、100匹の羊の中から1匹が迷い出ると、その1匹を探しに出かける。まじめにそう読まなければならないのだと私は思っています。

ただし、私もこの話の内容が分かりませんでした。しかし、よくよく考えていて、「なるほど！」と分からない原因が分かりました。迷い出た1匹の羊に焦点を当てて読むから分からなかったのです。99匹の羊の立場に自分を置いて読み直してみると分かるのです。

そのためには、この譬え話には続編を作らなければなりません。

上記の出来事があり、迷子になっていた1匹が見つかって元の100匹がそろった後のことです。それから後に、二度と迷子の羊が出ることはなかったのでしょうか。いいえ。きっとまた違う羊が迷子になったはずです。その時です。迷子になった別の羊の心境を思った時に、この譬え話の意味が分るのです。

初めに戻って、先の1匹の羊が迷子になり、その羊を探すために羊飼いは99匹を野原に残して出かけました。やがて見つけ出します。野原に残っていた私たち99匹は戻って来た羊に向かって「えらい迷惑をかけよって。おまえのせいで…」とさんざん怒鳴りつけ、羊飼いに向かっても「あなたは何てむちゃなことをするのですか。あなたは私たちよりもいなくなったこいつが好きだったのですか」と文句たらたら言いました。

それからしばらくしてのことでした。今度は、100匹の群れからあなたが迷子になり、崖から落ちて足に怪我をしました。その時です。あなたはこの羊飼いをどう思いますか。

羊飼いは必ず私を探しにきてくれる。そう思いませんか。なぜなら、ついさっき、迷子の羊を徹底的に探し回って見つけ出したからです。だから、迷子の私を見つけ出すまで徹

底的に探し出してくれる。山の奥に分け入ったり谷底にまで降りたりして、大声をあげて私の名前を呼びながら探しに来てくれると想像するはずです。今さっき、野原に残されて文句たらたら待っていた99匹の羊は、必死になって探している羊飼いの後ろ姿を見ていたので、次に自分が迷子になっても必ず私を探しに来てくれるという羊飼いに対する確信は、自分が迷子になるという経験をして初めて持つことができました。

しかし、反対の内容の続編も作る必要があります。迷子の1匹を探すことをあきらめた羊飼いの場合です。1匹減って99匹になった羊の群れの中から更に1匹、あなたが迷子になりました。あなたは羊飼いのことをどう思いますか。

少し前、その羊飼いは迷子の1匹を見捨てたのです。ということは、羊飼いは迷子になったあなたを探し出しますか。あなたの名を呼んで探し回りますか。羊飼いはあなたを探しには絶対に来ません。普段では、羊飼いは口では「一匹の命は大切だ」と言いますよ。しかし、実際には絶対にあなたを探しに来ない。迷子の羊を探しに行かなかった先ほどの羊飼いの後ろ姿で分かってしまったのです。羊飼いはあなたを探しに絶対に来ない。こうして、迷子になったあなたは完全な絶望の中に陥ります。こういう内容の続編です。

こう見てきますと、分かることがあります。1匹の羊を徹底的に守ることが残り99匹を大切にしていることになるということです。なるほど、居残りの99匹は羊飼いが迷子の1匹を探し回っている間、不安に陥ることでしょう。「羊飼いが留守の間、我々はどうしたらいいのか」と文句たらたら思うことでしょう。しかし、1匹を守ることで残り99匹を守っていることが分かるのです。あなたが迷子になって初めてそれが分かるのです。迷子の羊のために必死になった羊飼いは、今度、私が迷子になった時、必死になってくれる。1匹のために命懸けになったことは99匹のためにも命懸けになるのです。

実は、これがこの譬え話の言いたい内容です。そして、もう私が言いたいのかお分かりだと思いますが、これがキリスト教保育のベースにある考え方です。

なぜ、キリスト教保育が「一人一人の子どもを大切にする」というのか。もしかしたら、一人の園児に関わることで「えこひいきをしている」と文句が出るかもしれません。そうではないのです。保育者がその園児に必死にしていることは、同時に他の園児にもすることになるのです。その意味で、キリスト教保育に関わる保育者は、全体を見ながら一人一人を見ます。一人一人が神に愛されたかけがえのない命ですからね。どうして、無視することができましようか。第一、保育者から見たら受け持ちの園児は多く見えますが、園児一人一人から見たら保育者はたった一人ですもんね。だから、保育者はたくさんの園児を見つつ、「園児から見たら保育者は一人なのだ」という園児の視点を大切に、園児に寄りそいます。

これが日本中のキリスト教保育が実践している基本的な立ち位置です。「命を大事にする」と口で言いつつ、実際にはリストラをしてしまう、まるで社会の縮図を表わすような園にはなりたくありません。

■上記の文章は、1月24日（木）開催の原稿です。有意義な一時を持つことができました。

■次回は2019年3月14日（木）午後1:00の予定です。